

異文化交流の楽しみ方

内野せつ子さん（ゆずの台台）

埼玉県では、日本語国際センターで日本語を学んでいる研修生に、ホームステイを通じて日本の文化に触れる機会を提供するワンナイトステイという事業を行っている。

これまでに何回もワンナイトステイに協力をいただいた、内野せつ子さんに外国人研修生を受け入れる楽しみについて話をうかがった。

内野さんは、海外旅行がきっかけで外国の文化に興味を持つようになった。しかし、旅行ではその国の人と直に接する機会が少ないため、実際に外国の習慣や生活する人の価値観に触れるにはホームステイの受け入れが、いい機会になると考えた。「実際に話してみないと分からないことってたくさんあるんですよ。この事業は、日本語が話せる人が来てくれるので助かりますね」と語ってくれた。

6月21日、22日にもタイで日本語を教える研修生ピシャイさんを受け入れてもらった。ピシャイさんは当初、緊張もあり、口数も少なめだったが、夕食で焼き鳥パーティーを催したところ徐々に慣れてきた様子で、翌日には、いっしょに和紙作りを体験したり、家族とボーリングにも行

った。「来た人に楽しい思い出を作ってもらおうと思っっていますが、うちの場合、家族と一緒に楽しもうと考えています」と語る内野さん。必要以上の気を使わずに、普段の生活のなかにそのまま受け入れている様子が印象的だった。

「根本的に人と接することが好きなんです。ホームステイも家族が一人増えた感じで、かえって家がにぎやかになって楽しいですよ」と笑顔で話してくれた。内野さんは、ホームステイの人たちのことを話すときは本当にいきいきとしている。何事もまず興味を持ち、そして自分が楽しむことが必要であると感じた。

内野さんは、これからも外国人研修生の受け入れに協力するという。異文化交流を心から楽しんでいる様子が、その笑顔から伝わってきた。



内野せつ子さん（左）とタイからの研修生ピシャイさん（右）

ワンナイトステイについての問合せ

役場秘書広報課広報聴係

☎295-2112内線332

毛呂山歴史散歩

文化財シリーズ 185

盆迎え・盆送り

毛呂山のお盆は一部の地域を除いて毎年、7月23・24・25日とされています。このころになると町内のあちこちから提灯を持って祖先の精霊を送り迎える姿が見られます。

意外にもお盆の行事は7月初旬から始まります。7月1日は地獄の釜の蓋が開けられ、霊が旅立ってくる日といわれます。新盆の家では1日から盆まで夕方、提灯に火を灯し、亡くなった方の帰りを待ちました。田植えと麦の刈入れも終わったこの日は、まんじゅうなどの祝い食（毛呂山ではよくカワリモノといわれます）を作りました。

7月23日は盆迎えの日です。今はほとんど行われていませんが、以前は青竹などで盆棚を作り、位牌・仏具・花・果物などを供えて鬼灯を飾り、行灯に火をいれて精霊を迎えます。提灯と線香を持って墓地に向かい、墓地では線香の火で提灯に火を灯し、昔は「さあさ皆さん、お待ち

どうさまでした。お迎えにきました」などといっておんぶする真似をして歩き、縁側から家に招き入れました。盆の間は毎日ぼたもちやうどん、煮物などを供えて精霊をもてなし、盆送りの25日夜遅くまたは26日朝、再び提灯を灯して縁側より出て墓地に精霊を送り届けます。送り火といって盆送りの日に家の門口で火を焚くこともありました。いずれも精霊があつた世への道を間違えなく帰ることができるよう案内します。

このような祖先の霊を送り迎える行事は中世には庶民の間で行われていました。それ以前の平安時代には朝廷の仏教行事として7月15日に行われる読経を盂蘭盆会としていました。それが祖先の霊を敬いながらも霊がさまようことを恐れていた日本人の古来からの信仰と結びつき「お盆」として成立したのです。

日本人に長く受け継がれ、今も生活に息づいている盆行事にあらためて注目してみたいかがでしょうか。



写真：新盆の送り火を門口で焚く様子